



上向台小だより

2月号
西東京市立上向台小学校
令和7年2月3日

<http://www.nishitokyo.ed.jp/e-kamimukoudai>



道徳の教科化7年目を迎えて ～子どもの成長を見守る評価とは？～

副校長 河又 学

道徳が教科化されて、7年目を迎えました。いじめ問題、情報モラル、ESD（持続可能な開発のための教育）など様々な教育課題がありますが、教育基本法にあるように「豊かな情操と道徳心（豊かな心）を培う」ことは今も昔も変わっていません。道徳が教科化されて変化したことは、
・教科用図書を主たる教材として使用すること
・道徳科の授業で児童生徒を評価すること
です。

従来、道徳は教科用図書ではなく、文部科学省や地方公共団体、出版社から発行された「副読本」を使用していました。また、教科ではなかったため、評価も行われてきませんでした。

令和3年度に文部科学省が実施した「道徳教育実施状況調査」によると、道徳の教科化を受けた学校の前向きな変化として、

- ・記述評価により、児童生徒が自分のよさや成長を実感できるようになった
- ・評価することにより指導中の児童生徒の発言や様子に教師自身が様々な視点で目を向けることが増えた

ということが示されています。

では、教科化されたことで、道徳科の評価の在り方はどのようなものになったのでしょうか。平成28年に文部科学省から報告された「『特別の教科道徳』の指導方法・評価等について」によると、

- ・数値による評価ではなく、記述式とすること
- ・個々の内容項目ではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること
- ・他の児童との比較による評価ではなく、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として行うこと
- ・学習活動において児童がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること

と示されています。

そのため、本校でも児童の学習の過程や成果などの記録を計画的に蓄積したり、児童が行う自己評価や相互評価を活用したりしながら、長いスパンで見えてくる学びの姿の成長の様子を評価するようにしています。また、授業中の発言がほとんどない、文章表現が得意ではない、表情にも表れにくい児童に対しても配慮しながら、適正な評価を目指しています。

道徳の評価は具体的には、

- ①自己を見つめることができたか
- ②物事を多面的・多角的に考えることができたか
- ③自己の生き方について考えを深めることができたか

について、児童の学びや成長を把握していきます。

また、1単位時間のみの評価ではなく、学期などの一定のまとまりで児童を見取り、大きくくりな評価をするよう工夫しています。

さて、2月8日（土）には、「道徳授業地区公開講座」を予定しております。当日は、いじめに関する内容を扱う「特別の教科 道徳」の授業を下のとおり公開いたします。

- 第1学年
「ジャングルジム」（公正、公平、社会正義）
- 第2学年
「ぶらんこ」（友情、信頼）
- 第3学年
「なおとからのしつもん」（公正、公平、社会正義）
- 第4学年
「ちょっと待ってよ」（公正、公平、社会正義）
- 第5学年
「ブランコ乗りとピエロ」（相互理解、寛容）
- 第6学年
「昼休みのコートで」（相互理解、寛容）

授業の詳細（学習指導案）につきましては、下の二次元コードから御覧になれますので、御参照ください。

また、授業後には、お笑いコンビの「オシエルズ」（矢島 ノブ雄・野村 真之介）様による

笑いといじめ
～人を傷つける笑い、人を元気にする笑い～

をテーマにした講演会・意見交換会を予定しています。「オシエルズ」様は、日本一学校を回る芸人として知られ、毎年全国100校以上の学校を訪れています。教員免許をもち、大学でも講師をされ、お笑いと教育の二足のわらじを履きながら精力的に活動されています。

これらの機会を活用して、私たち大人ができることについて、ぜひ一緒に考えていただくと考えております。「道徳授業地区公開講座」及び講演会・意見交換会への御参加を、心よりお待ちしております。



学習指導案

へのリンク